

シャレイア語文法

2代7期

Ziphil Aleshlas

この文書は、2代7期(シャル歴 1501年7月11日以降適用)のシャレイア語の文法をまとめたものである。2代6期以前の文法とは異なる部分があるので注意されたい。

シャレイア語文字とラテンアルファベットには形が似ているものがあるため、本文やラテンアルファベットはセリフ体、シャレイア語文字はサンセリフ体として差別化を図った。

文字

アルファベット

シャレイア語では、「祠字」と呼ばれる全部で 24 個のアルファベットを用いる。文字の形と発音とそのラテンアルファベット転写は以下の通りである。

文字	転写	発音	文字	転写	発音
l	s	/s/	φ	c	/c/
d	z	/z/	η	q	/ʒ/
h	t	/t/	D	r	/r/
N	d	/d/	ρ	l	/l/
q	k	/k/	3	m	/m/
g	g	/g/	s	n	/n/
p	f	/f/	υ	y	/j/
z	v	/v/	l	a	/a/
č	p	/p/	c	e	/e/
b	b	/b/	o	i	/i/
x	x	/ʃ/	u	o	/ɒ/
v	j	/ʒ/	n	u	/ʊ/

ラテンアルファベット転写は、祠字を表示できない環境で用いたり、祠字を覚える前の学習者が用いたりするためのものである。また、発音は〈音韻変化〉の節で説明するもの以外は、ほとんど上記の通りである。

祠字には数字もある。シャレイア語では 10 進法を用いて数字を数えるので、以下の 10 個の数字を用いる。

文字	数	文字	数
∅	0	τ	5
1	1	3	6
9	2	e	7
ə	3	ó	8
ε	4	B	9

文章を書く際は、数の読みをアルファベットで書くのではなく、数字をそのまま書くのが一般的である。

品詞

基本 8 品詞

シャレイア語には 8 つの品詞がある。動詞、名詞、形容詞、副詞、助詞、関係詞、接続詞、間投詞である。その役割は、ほとんど日本語の品詞や英語の品詞と同じである。

その他の品詞

基本 8 品詞以外に、シャレイア語には飾詞というものがある。これは、いわゆる接頭語や接尾語のことで、他の語の前や後について意味をつけ加える役割がある。これは基本品詞に入れる考え方と入れない考え方がある。

語と品詞

シャレイア語の語のほとんどは、様々な品詞をもっている。例えば、janl という語は、動詞と名詞と形容詞と副詞の 4 つの品詞をもっている。これらは、語順によってその品詞が決定される。ただし、どの品詞でその語を使っているのかが曖昧な場合は、飾詞を語の最後につけて区別させる。品詞を決定させる飾詞には以下の 4 種類がある。

飾詞	品詞
at	動詞
ak	名詞
es	形容詞
ol	副詞

例えば、すでに例に出した janl に対し、飾詞 at をつけて janlat とすれば、それが動詞の意味で使われていると分かる。ただし、これらの飾詞の使用頻度は少なく、口語では語の強弱や切れ目などによって品詞は特定できるので、全く使われない。

基本語順

動詞＋修飾語句

シャレイア語では、基本的に文の先頭には動詞が置かれ、その動詞の後に主語や目的語などの、動詞を修飾する要素が置かれる。

le vals a del.

→ 私は走る。

上の例では、動詞 vals が文頭にきていて、その修飾要素 a del がそれに後続している。le は現在時制を表していて、詳しくは〈時制副詞〉の項で説明する。

動詞の修飾要素は複数にすることも可能である。

zo gils a del e daat co vos.

→ 私はあの人から椅子を買った。

この例では、動詞 guls を後続の 3 つの修飾要素 a del, e daat, co vos が修飾している。修飾要素の順番は自由である。すなわち、上の文章は zo gils co vos a del e daat と書いても良い。ただし、シャレイア語は重要な部分を前にもってくるという特徴があるので、このようにすると筆者もしくは話者が vos に重点を置いていることになる。また、zo は過去時制を表していて、これも詳しくは〈時制副詞〉の項で説明する。

日本語の読点や英語のピリオドに相当するものとして、シャレイア語では文末に点を2つ打つ。手書きの場合はコンマのように左下に払うこともある。

被修飾語＋修飾語句

動詞を修飾する語句は動詞の後に置くことはすでに説明したが、動詞以外でも同じことが起こる。例えば、名詞とそれを修飾する形容詞では、名詞が先で修飾語句である形容詞が後に置かれる。また、形容詞を修飾する副詞も同様に形容詞の後に副詞が置かれる。

le sin a del e paf falas.

→ 私は赤い花を見る。

le kuls a del e vit dacos zap.

→ 私はとても高価なペンを持っている。

同じ語を複数の語句で修飾したい場合は、その語句を被修飾語の後に並べる。その順番に制限はない。

助詞＋名詞

シャレイア語は、名詞は必ずその前に助詞を伴う。助詞は、例えば主格や与格など、名詞の格を示すものである。

ただし、助詞の後には必ず名詞がくるとは限らない。例えば、動詞 **es** に続く助詞 **e** には形容詞が指定されることもある。ただし、このような例は少ないので、基本的に助詞の後には名詞で、名詞の前は助詞としても問題ない。

否定文

基本否定文

否定文は、肯定文の動詞のすぐ前に「否定副詞」と呼ばれる副詞 **nu** を置くことで作ることができる。修飾要素が前に置かれるという意味では特殊である。

le nu cant a del e xalia.

→ 私は魔法が好きではない。

この副詞 **nu** は動詞以外も否定する。例えば、名詞を否定すると「～ではない何か」を表すことができる。

es a del e nu elvin.

→ 私はエルヴィンではない人である。

否定副詞には、**nu** の他に **du** というものもある。これは、英語の **never** と同じで強い否定を表す。使い方は **nu** と全く同じである。

部分否定、全部否定

否定副詞 **nu** は直後の語のみを否定する。これを活かすと、部分否定と全部否定の文を作ることができる。

普通に動詞のみを否定すると全部否定の文章になる。

nu ros a del ta keil et.

→ 私は毎日走らない。

上の文章で **nu** が否定しているのは動詞 **ros** のみなので、ずっと走らないことになり、全部否定の意味になるのである。これに対し、「全ての」などの語を否定すると部分否定の文章になる。

ros a del ta keil nu et.

→ 私は毎日走るというわけではない。

「全ての日」の「全て」が否定され、「全てではない」となるため部分否定の意味が生まれるのである。

否定相当語

シャレイア語では、否定語を伴わなくても否定を意味する語がいくつかある。その代表例として、英語の *nobody, nothing, nowhere* に対応する **nees, neend, neelt** がある。

taal a nees e teend.

→ 誰もそれを食べない。

これ以外にも、「全く～しない」という意味の **nek** や、「ほとんど～しない」という意味の **niib** などがある。

疑問文

諾否疑問文

諾否疑問文は、平叙文の文末に「終副詞」と呼ばれる副詞 **siin** をつけることで作ることができる。この終副詞については〈終副詞〉の節で詳しく説明する。

lelu riif a los ye xaleia siin?

→ あなたはシャレイア国に住んでいるか?

疑問文を読むときは語尾を上げ、文末には「?」という記号を使う。これはクエスチョンマークに相当する記号である。

この疑問文に答えるには、**ja** と **ne** を使う。**ja** は聞かれた内容が正しいとき、すなわち聞かれた疑問文の **siin** を取った文章が真実のときに使う。**ne** はその逆である。つまり、日本語の「はい」と「いいえ」と同じ用法で、英語の「yes」と「no」とは異なる用法である。

口語では、この **siin** はしばしば省略され、平叙文の語尾を上げるだけになる。

また、**siin** を使うにもかかわらず文末を?で終わらずに平叙文のように、で終わらせることで、「どうして～しないのか」というような反語的意味になり、軽い命令のニュアンスが出る。

le riif a los ye xaleia siin.

→ あなたはシャレイア国に住まないのか。

これは口語でのみ使われ、直接命令するのを避けるときに使われる。この用法における **siin** は省略されない。

疑問詞疑問文

疑問詞を用いる疑問文は、平叙文において尋ねたい部分を疑問詞に変えるだけで作ることができる。語順が変わることはない。

es a los e ses?

→ あなたは誰か?

al a los e send?

→ あなたは何をするのか?

疑問詞は以下の4つのみである。**sek** と **seiv** は形容詞で、他は名詞である。

疑問詞	意味
ses	誰 (名詞)
send	何 (名詞)
selt	どこ (名詞)
sek	どの (形容詞)
seiv	どんな (形容詞)

諾否疑問文のように文末に **siin** をつけても良いが、任意である。

さて、これと助詞とをうまく組み合わせることで、「なぜ」や「どうやって」などのような疑問文も作ることができる。例えば、原因理由を表す助詞 **sali** と疑問詞 **send** を組み合わせることで「なぜ」という意味になる。

zo raak a los e mabol sali send?

→ なぜあなたは家を買ったのか?

このようにして作ることができる疑問詞句は、主に以下の3つである。

疑問詞	意味
ta send	いつ
sali send	なぜ
qasi send	どうやって

上記のような助詞と組み合わせた疑問詞句内で使われる疑問詞は全て **send** である。

この疑問文に答える場合、答えが名詞の場合は、その名詞とそれに付属する助詞を、答えが形容詞の場合は、その形容詞とそれが修飾する名詞およびそれに伴う助詞を、答えが副詞の場合は、その副詞のみを答える。

zo iiv a los de delfaria ta send?

→ あなたはいつデルファリア市に行ったのか?

ta ketaak.

→ 昨日だ。

答えが動詞の場合は、**e kin**+動詞の形で答える。また、答えが節の場合は、接続詞+節の形で答える。

選択疑問文

選択疑問文における選択肢は、助詞 **depi** を用いて表現する。選択肢と選択肢は後に説明する接続詞 **o** を用いてつなげる。

le es a ses e boonk jok depi vond o find?

→ あれとこれではどちらがより安いのか?

上の例では、まず「何がより安いのか」という普通の疑問文を作り、そこに **depi** 句を用いて選択肢を提示している。選択させるので、かならず疑問文内に比較の意味の語が含まれる。上の例では「より～」という **jok** という語が使われている。また、この場合も、文末に **siin** をつけても良い。ただし、つけないのが主流である。

depi 句を使わずに、接続詞 **ai** を用いて2つの疑問文をつなげて選択疑問文を作ることもしできる。

le es a vond e boonk jok siin, ai le es a find e boonk jok siin?

→ あれがより安いのか、それともこれがより安いのか?

es a los e saxalia siin, ai nu es a los e saxalia siin?

→ あなたは魔導師か、それとも魔導師ではないのか?

ただし、上の例文は冗長なため、以下のように繰り返し部分が省略されることが多い。

le es a vond e boonk jok siin, ai a find siin?

→ あれがより安いのか、それともこれか?

ji ai nu es a los e saxalia siin?

→ あなたは魔導師か、そうではないのか?

ここで出てきた **ji** は否定副詞 **nu** の反意語であり、**nu** とは逆に後続する語を肯定する役割をもっているが、上の例のような選択疑問文の省略形でしか使用されない。

機能副詞

時制副詞

時制は「時制副詞」と呼ばれる副詞を動詞の前に置くことで示すことができる。シャレイア語の時制は、以下の時制副詞で表される4種類である。

語	時制
fo	通時
le	現在
zo	過去
pe	未来

通時時制は、ある程度長い一定の時間内において不変である事実を述べるときに使う。例えば、「地球は青い」や「彼はシャレイア語を話す」などである。後者の例は、永遠に正しい事実ではないが、彼が活着ているというある程度の時間の幅の中では常に正しいことなので、通時時制を用いる。習慣なども通時時制で表す。

fo es ans li vos e sant.

→ 彼の目は青い。

現在時制、過去時制、未来時制は、それぞれ現在の出来事、過去の出来事、未来に起こるであろう出来事を表す。ただし、英語の will とは違い、未来時制に推量の意味は含まれない。

通時時制の場合に限り、時制副詞を省略できる。その他の時制の場合は、必ず時制副詞で時制を明示する必要がある。

相副詞

相は「相副詞」と呼ばれる副詞を動詞の前に置いて示す。シャレイア語の相は以下の7種類である。

語	相	語	相
li	将然	lu	継続
fa	開始	vu	終了
ya	経過	ma	無
di	完了		

将然相、経過相、継続相はそれが表す時間に幅があり、それに対し、開始相、完了相、終了相はある1点のみを表す。無相は、将然相から終了相まで、もしくは将然相から完了相までを表す。

経過相と継続相は混同しやすいので注意が必要である。動作が完了していれば継続相であり、完了していなければ経過相である。

無相の場合のみ、相副詞を省略できる。それ以外の相の場合は省略できない。ただし、es や scal などのような、相副詞を省略した場合に継続相になる動詞もある。

自他副詞

動詞には「起きる」と「起こす」という、自分自身で可能な動作を表す動詞と、その動作を相手ができるように手助けしてあげることを表す動詞のペアが存在する。このペア

となった動詞を、シャレイア語では「自他動詞」と呼び、前者を「自動詞」といい、後者を「他動詞」と呼ぶ。

自動詞と他動詞は同じ動詞を使う。どちらの意味で用いているかは、動詞の前に以下の「自他副詞」と呼ばれる副詞を置いて明示する。

語	自他
te	自動
ve	他動

原則として、他動詞の動作の相手は **je** 句で表現される。

te daol a del.

→ 私は横になる。

ve daol a del je los.

→ 私はあなたを横にする。

自他動詞のペアをもっていない動詞は、自動詞として扱い、動詞の前に **te** を置く。しかし、この場合の自他副詞のみ省略でき、めったに書かれない。

法副詞

法は「法副詞」と呼ばれる副詞を動詞の前に置いて表現する。以下に主な法副詞を挙げる。

語	意味	語	意味
kazo	～しろ	lije	～する必要がある
bege	～するに違いない	pomi	～するかもしれない
doze	～しなければならない	sali	～するだろう
casi	～することができる	kadi	～するつもりだ
sete	～しようとする	vije	～するべきだ

kazo は否定副詞や否定相当語とともに用いられると、「～するな」という禁止の意味になる。

敬意副詞

文中に出てくる人物に敬意を払いたい場合は「敬意副詞」と呼ばれる副詞を用いる。敬意副詞は以下の3種類である。

語	自他
faa	尊敬
zee	謙譲
tan	丁寧

尊敬は、文の主語に対する敬意を表す。謙譲は、文の目的語などの主語以外に対する敬意を表す。丁寧は、話し相手に対する敬意を表す。この点は日本語と全く同じである。

尊敬 **faa** と謙譲 **zee** は動詞の前に置くが、丁寧 **tan** は文末に置く。

faa zo zof a tees de mabol li del.

→ 彼が私の家にいらっしやった。

es a del e elvin tan.

→ 私はエルヴィンです。

敬意副詞は同時に用いることもできる。その場合、**faa** と **zee** は合わせて **faazee** という 1 語にして使う。

faazee zo taqal a melfia e fiical je kanzas tan.

→ メルフィアはカンザスに手紙をお書きなさいました。

この例では、メルフィアに敬意を示すために尊敬、カンザスに敬意を示すために謙譲、話し手に敬意を示すために丁寧を用いている。

機能副詞の順序

これまで時制副詞、相副詞、自他副詞、法副詞、敬意副詞を説明したが、この 5 つの副詞をまとめて「機能副詞」と呼ぶ。今まで説明したように、機能副詞は動詞の前に置かれる。ただし、敬意副詞の **tan** のみ機能副詞に入れない。

機能副詞を 2 つ以上用いたい場合は、法福詞、敬意副詞、時制副詞、相副詞、自他副詞の順で並べる。否定副詞は自他副詞の後で、動詞のすぐ前に置かれる。時制副詞、相副詞、自他副詞を同時に使う場合は、この順で合成して 1 語とする。

levu zal a del e tast fik.

→ 私はこの本を読み終わった。

上の例では、現在時制終了相なので、現在時制の **le** と終了相の **vu** を合わせて **levu** という 1 語にして使っている。

態相当表現

態相当表現

シャレイア語は、「～する」という能動態と「～される」という受動態を区別して表現しない。これは、能動態、受動態というのは、主語か目的語のどちらに重点を置いて表現しているかの違いにすぎないため、この違いを前置詞句の順番で表現すれば良いからである。

普通、主語を表す **a** 句を動詞のすぐ後に置くが、目的語を表す **e** 句や **je** 句を代わりに動詞のすぐ後に置くことで、目的語の部分に重点を置いていることになり、受動態のような表現を作ることができる。これを「受動態相当表現」という。

zo zal a del e tast fik.

→ 私はこの本を読んだ。

zo zal e tast fik a del.

→ この本は私に読まれた。

ただし、上の例では前置された **e tast fik** の部分がいわば強調されているとも考えられる。基本的に、シャレイア語はこの受動態相当表現と強調を区別しない。

比較

比較級

A と B の 2 つのものを比較したときの「A は B より～だ」という表現を「比較級」と呼ぶ。

比較級の文を作るには、まず「A は～だ」と「B は～だ」という通常の文を書く。

le es a paf vok e yuk.

→ あの花は美しい。

le es a paf fik e yuk.

→ この花は美しい。

次に、比較している概念を表している形容詞または副詞 (上の文では yuk) の、「より～」という意味の副詞 jok をつける。

le es a paf vok e yuk jok.

→ あの花はより美しい。

最後に、比較対象の B を含む文を接続詞 ge の後に置く。

le es a paf vok e yuk jok, ge le es a paf fik e yuk.

→ あの花はこの花より美しい。

これでは冗長なため、主節と同じものは次のように省略される。同時に、ge 節が短くなるため、, が取り除かれる。

le es a paf vok e yuk jok ge a paf fik.

→ あの花はこの花より美しい。

比較対象を表す ge 節は省略することができる。その場合、文脈から比較対象が明らかか、もしくは漠然とした比較のどちらかになる。

「私は彼女より 7cm 背が高い」などのように、どの程度違うかを表すには same 句を使う。

le es a del e loon jok ge a tees same 7 tevokt.

→ 私は彼女より 7 テヴオクト背が高い。

倍数表現も比較級を用いる。

es a sendra e foon jok ge a kelvis same 5 leis.

→ センドラ港町はケルヴィス村より5倍広い。

倍数は数字に **leis** をつけて表現する。

最上級

A を X という範囲の中で比較したときの「A は X の中で最も～だ」という表現を「最上級」と呼ぶ。

最上級の文を作る方法は比較級の場合とほぼ同じである。異なる点は「最も～」という意味の副詞 **vask** を用いることと、範囲を表す「～の中で」という表現は **depi** 句を用いることである。

le ros a fis sail vask depi kulan li del.

→ 彼は私のクラスの中で最も速く走る。

この **depi** 句は省略が可能である。

「2 番目に～だ」などのような順位を表す場合は、比較級の時と同じ **same** 句を用いる。

le ros a fis sail vask depi kulan li del same 4 jun.

→ 彼は私のクラスの中で4番目に速く走る。

順位は数字に **jun** をつけて表す。

同等級

A と B の2つのものを比較したときの「A は B と同じくらい～だ」という表現を「同等級」と呼ぶ。

同等級の作り方は比較級と同じである。「同じくらい～」は **gefk** を用いる。

le es a paf vok e yuk gefk ge a paf fik.

→ あの花はこの花と同じくらい美しい。

これと同じ意味で別の表現として、主語に比べているものを2つ並べる方法もある。

le es a paf vok o fik e yuk gefk.

→ あの花とこの花は同じくらい美しい。

最初の例文では **paf vok** に重点が置かれているが、この例文は **paf vok** と **paf fik** の両方に重点が置かれているという点でニュアンスが異なる。

関係詞

関係詞

ある名詞を文が修飾するとき、その接着剤として「関係詞」と呼ばれる語を用いる。

次の2つの文を関係詞を用いて1つにまとめる。

es a vos e seef.

→ あの人は女性だ。

zo akut a del e tees ta ketaak.

→ 私は彼女に昨日会った。

2文目の **tees** が1文目の **seef** を表しているとするれば、2文目を1文目の **seef** を修飾するという形をとって、文を1つにまとめることができる。それを作るには、まず修飾される名詞と同じものを表している名詞（上の例では **tees**）を関係詞 **bis** に置き換える。そして、**bis** を修飾する文の文頭にもって行く。そして、この修飾する文を被修飾語のすぐ後ろに置く。これで文をまとめることができる。

es a vos e seef bis zo akut a del e ta ketaak.

→ あの人は私が昨日あった女性だ。

ただし、**bis** に付属していた助詞の位置を変えても問題ない場合、この助詞を以下のように文末にもって行くことが多い。

es a vos e seef bis zo akut a del ta ketaak e.

→ あの人は私が昨日あった女性だ。

文末にもって行けない場合は、以下のように名詞を修飾する性質のある助詞が **bis** に付属していた場合である。

le mat a del e zostep bis es a mafs li e saxalia.

→ 私は母親が魔術師の少年を知っている。

上の例の場合、**li** の位置を変えてしまうと意味が変わってしまう。

さて、この関係詞 **bis** は修飾される名詞を限定する。限定せずに名詞を修飾したい場合は **bis** の代わりに **mes** を用いる。これは、英語におけるコンマ+関係詞の用法と同じである。

zo iiv a del de xaleia mes ilt a kelvis ye.

→ 私はケルヴィス村があるシャレイア国に行った。

関係詞節内の時制は、主節の時制より前か後か同じかを示す。すなわち、主節が過去形で関係詞節が現在形なら、関係詞節内は過去における現在を表すので、今から見ると過去の出来事ということになる。

接続詞

接続詞

語句と語句、文と文をつなげるものを「接続詞」と呼ぶ。シャレイア語では、語などの文以外の要素をつなげる接続詞を「語句接続詞」と呼び、文をつなげる接続詞を「文接続詞」と呼ぶ。

文接続詞には、以下のようなものがある。

語	意味
o	と
ai	または

語句接続詞は、名詞と名詞、節と節など、文法的に等価なものを結ぶ。動詞と名詞などのように、等価でないものは基本的に結べない。

文接続詞には、以下のようなものがある。

語	意味	語	意味
u	そして	ta	～するとき
ai	もしくは	tora	～するために
zae	しかし	sali	～するので
zi	もし	paki	～するように

文接続詞がつけられた方の文を「接続詞節」と呼び、それに対してもう一方を「主節」と呼ぶ。

文接続詞には、同じ意味で助詞の用法をもっているものが多い。例えば、時刻を表す ta は「～のとき」という意味で、後ろに名詞をとって助詞として使うことができる。

文接続詞で2つの文をつなぐ場合は、文と文の間にコンマに相当する記号、を打つ。

sali le cant a del e tast, le kuls a del e tees cesk.

→ 私は本が好きなので、たくさんの本を持っている。

また、接続詞節は主節の前に置いても後ろに置いても良い。例えば上の例文では、sali 節は kuls a del e tees cesk の後に置いても良い。

接続詞の副詞的用法

接続詞の働きは、基本的に2つの文をつなげて1つの文にすることだが、2文をつなげずに使うこともできる。

le kuls a del e tees cesk. sali, le cant a del e tast.

→ 私はたくさんの本を持っている。それは本が好きだからである。

上の例では、接続詞 sali は文と文をつなげているわけではないが、結果と原因という、前の文と後の文の意味上のつながりは表している。これを「接続詞の副詞的用法」といい、接続詞の後には、を打つ。

挿入、強調

挿入

動詞を修飾する副詞は基本的に文末に置くが、文中に置くことも可能である。これを「副詞の挿入」と呼ぶ。

次の文では、副詞 **tukt** が文末に置かれている。これは最も一般的な書き方である。

iiv a del de teelt tukt.

→ 私はそこへときどき行く。

最初に説明したように、この副詞を文中にもって行くこともできる。動詞のすぐ後にもって来る場合は特に何も必要ないが、前置詞句と前置詞句の間にもって行く場合は、その副詞の前後に、が必要である。

iiv tukt a del de teelt.

→ ときどき私はそこへ行く。

iiv a del, tukt, de teelt.

→ 私はときどきそこへ行く。

動詞を修飾する副詞は、動詞のすぐ後か、前置詞句と前置詞句の間か、文末にしか置くことはできない。

文の途中には副詞の他に間投詞が入ることがある。

pe iiv a los, tee, de seelt?

→ あなたは、ねえ、どこに行くの？

上の例文の **tee** ような、呼びかけの間投詞が挿入されやすい。

強調

動詞を修飾する前置詞句は前後の入れ替えが自由に可能で、前のものに重点を置かれるということはすでに説明した。つまり、何か強調したい語句があるのならば、その語句を前にもって行けば良いのである。

例えば、以下の文では **tees** が強調されている。

zo veiz e tees a del.

→ 彼を私は待った。

しかし、これはあまり強い強調ではない。より強い強調にしたい場合は、強調したい語を含む前置詞句を文頭にもって行き、を打つことでそれが可能である。

e tees, zo veiz a del.

→ 私が待ったのは彼だ。

同じように動詞を修飾している副詞も前にもって行き強調することができる。ただし、形容詞や名詞を修飾している副詞はこのような方法で強調することができない。

省略

省略形

「～ということ」を意味する **kin** 節はよく用いられるので、「'n」と省略される。例えば、**e kin** は **e'n** と省略される。

重要語

助詞

シャレイア語では、全ての名詞はその前に助詞を必ず伴う。助詞は名詞の格を示す。主な助詞として、以下のようなものがある。

語	意味	語	意味
a	～は	to	～へ
e	～を	de	～から
je	～に	li	～の

助詞＋名詞のセットを「助詞句」と呼ぶ。助詞句は動詞や名詞を修飾する。

名詞の前に必ず助詞が置かれるが、助詞の後に必ず名詞が置かれるとは限らない。例えば、動詞 **es** に続く助詞 **e** の後にはしばしば形容詞が置かれる。ただし、これは例外的であり、普通は助詞の後には名詞が来る。

終副詞

副詞の中では必ず文末で用いられるものがあり、これを「終副詞」と呼ぶ。これまで説明したものの中では、疑問文を作る **siin** と丁寧を表す **tan** がそれである。

終副詞は大きく3種類に別れ、1つは文に他の意味をつけ加える働きがあり、主に以下のようなものがある。

語	意味
siin	～か(疑問)
tan	～です(丁寧)
salen	～ですよ(確認)
saltin	～だがどうか(返事催促)

2つ目は話者の気持ちを表すものである。これは口語と文語の両方で用いられる。

語	意味
fean	～してくれる(感謝)
gun	～しやがる(迷惑)
bin	～である(断定)
reen	～だなあ(弱詠嘆)
reden	～だなあ(強詠嘆)

最後は語調を整えるもので、日本語で語尾につけられる「～さ」や「～だわ」のようなものと同じである。これは語によって使用する性が決まっているので、それも記す。

語	印象	性
o	軽く	男女
vo	活発に	男

tu	活発に	女
ki	元気に	男
mi	元気に	女
fe	静かに	男
si	静かに	女

o は接続詞に同じ語があるが、偶然一致しているだけで関係はない。

前置副詞

副詞は修飾要素なので、基本的にその被修飾語の後に置かれるが、一部の副詞は被修飾語の前に置かれるものがある。これを「前置副詞」と呼ぶ。前置副詞には、efs や uub などがある。

否定副詞 ji

否定副詞についてはすでに nu と du を説明したが、ji というものもある。nu が後続する動詞を否定するのに対し、これは後続する動詞を肯定する働きをもっている。しかし、通常の文章では使われない。

ji が使われるのはおもに 2 つの場合がある。1 つ目は、nu との対比する場合である。〈選択疑問文〉で ji ai nu という表現が出てきたが、これは肯定と否定を対比しているためである。

2 つ目は、動詞を含む節全てを省略してしまった場合である。シャレイア語では、動詞の冗長な繰り返しを避けるため、英語の代動詞 do などを使わずに、動詞を省略してしまう。このときに、もともとは使われていなかった ji が現れる。

kazo pe ref e vit teek je del a, vi casi ji.

→ できればそのペンを渡してください。

上の例文の vi 節内は、もともと casi le ref e vit teek je del a los であるが、これは主節の内容と一致しているので、動詞を含め全てを省略し、代わりに ji が現れたのである。

数詞

数詞

シャレイア語では数を 10 進法で数えるため、数字は 10 個ある。それぞれの数の読み方は以下の通りである。

数	読み	数	読み
0	dul	5	xos
1	ont	6	ment
2	fiiz	7	kus
3	sil	8	bid
4	vak	9	rot

位の読み方は日本語と同じである。十、百、千の小区切りと万、億、兆、京、…の大区切りがある。

数	語	数	語
十	cat	兆	sanjak
百	fool	京	vanjak
千	geef	垓	xanjak
万	onjak	秭	manjak
億	fanjak	穰	kanjak

例えば、578902 は xos cat kus onjak bid geef rot fool fiiz と読む。

口語

機能副詞の省略

時制副詞の現在時制 **le** はよく省略される。また、過去の話をしていることや、未来の話をしていることが明白な場合、過去時制 **zo** や未来時制 **pe** もしばしば省略される。

関係詞の省略

被修飾語のすぐ後ろに関係詞節が置かれる場合は、関係詞 **bis, mes** はよく省略される。ただし、被修飾語のすぐ後に関係詞節がない場合には、省略することはできない。これは、離れていることを明示するためである。

その他の省略

諾否疑問文を作る **siin** はしばしば省略される。この場合、発音の際に語尾を上げるだけになる。ただし、反語的意味で用いる場合は、**siin** は省略されない。

音韻変化

l の変化

l が母音を伴わずに発音される場合、音が /ɫ/ になることがある。英語におけるいわゆる dark L と同じである。

n の変化

n は基本的に /n/ で発音されるが、後続する文字によっては、以下の表のように音が変わることがある。

後続音	発音
k, g	/ŋ/
f, v	/m/
c, q	/ɲ/
p, b	/m/
s, z, x, j, r	/ɳ/

例えば、bank は /baŋk/ と発音される。しかし、これらの音の変化は意識しなくてもおこることなので、特に注意を払う必要はない。

/ɪ/ の挿入

語末が母音の語の後に語頭が母音の語が続くと、その母音の間に /ɪ/ が挿入されて発音されることがある。例えば、o a sant は /o ɪa sant/ と発音される場合がある。この変化はゆっくり話すときには起こらない。

連続母音による変化

特定の母音が連続する場合、以下の表のように半母音が挿入されることがある。

母音	発音	母音	発音
ia	/ija/	ua	/ʊɪa/
ie	/ije/	ui	/ʊɪi/
io	/ijɔ/	ue	/ʊɪe/
ea	/eja/	uo	/ʊɪɔ/

例えば、xaleia は /faleija/ と読まれる場合がある。また、この変化は、話者の癖や話す速度によって起こったり起こらなかったりする。

シュワの挿入

子音が連続する場合、間にシュワが挿入される場合がある。また、単語の最後が子音で終わる場合、シュワが挿入される場合が多い。例えば、drook は /dɔp:kə/ と発音されることがある。シャレイア語は語末の子音が多いため、語末にシュワを挿入して語を聞こえやすくすることがよくある。